

学位論文題名

「日本近代詩」をめぐる概念編成の力学

学位論文内容の要旨

本論文は、「日本」の「詩」の系譜がどのように記述され、常識として流通するのかを、それぞれの時期における文脈から読み解く試みを積み重ねることによって明らかにしていく。

第Ⅰ部「〈空隙〉としての「口語詩」」においては、明治三十八年から四十二年にかけての「口語詩」概念編成のありようが検討の対象となる。明治三十八年から明治四十二年にかけて、「詩」における「革新」が提起され、それが「詩」と「言語」の問題として問題化された。こうした「詩」と「言語」、「詩」と「歴史」をめぐる地殻変動の背景には、「小説」ジャンルの格上げに伴う、「新体詩」ジャンルへの無関心に対する危機意識が、当時広がっていたと考えられる。そこでも、「詩」における「晦渋」の問題、「時代の国語」との乖離が「滅亡」の原因とみなされる。こうして、「小説」の対抗概念として「詩」を位置づける視点が獲得されるが、一方で、それが即ち「詩」の「言文一致」＝「言文一致詩」「口語詩」へとつながらなかったことを指摘する。「小説」の「言文一致」を「詩」において構想する際、当時の想像力が最初にいきつくのは、「民謡」「俗謡」である。そして、「民謡」概念も、当時において、生起しつつある概念であり、志田素琴らの立ち上げる「民謡」概念と、島村抱月、相馬御風などが構想する「言文一致の詩」「口語詩」の概念は、「国民詩」としての位置を相互に奪い合う関係であったといえる。島村抱月、相馬御風は、「民謡」を「言文一致の詩」「口語詩」の発想のベースとしながらも、「民謡」概念が引き寄せる「声」の概念を問題視し、「声」を脱色し、透明な言語としての「口語」によって表現されるべきものとして「言文一致の詩」「口語詩」を構想する。ただし、事態は、「民謡」陣営対「口語詩」陣営と単純化できるものではなく、「民謡」の現代化や、「新俗謡」の提唱といった、雑多な状況がそこにあったことも指摘する。

島村抱月、そして相馬御風によって示された「口語詩」の理念は、「口語詩」を歴史の発展の線上に置き、「口語詩以前」に戻ることを許さない不可逆な歴史観を提示したといえるが、明治四十年代に、その「口語詩」の排他的原理が、詩の制作の現場において、すぐに支配的な原理となったとは言えない。

このように、明治三十八年から四十二年の「口語詩」をめぐる問題系を、様々な面から検討することで、「口語詩」問題は、「小説」や「国語」、「民謡」、「文章」、「自然主義」といった問題と、様々な関係を取り結びつつも、個別の論理

として生成していったことを明らかにする。

第Ⅱ部「編成される詩の「現在」と「歴史」」においては、大正五年から七年にかけての「詩」の「場」の語り方、および「詩」の「歴史」の語り方を問題化し、「詩」の「現在と歴史」をどう記述するかが検討されるとともに、その記述を可能にした条件を、「神秘」「象徴」「民衆」「人格」「リズム」といったそれぞれの概念編成のレベルで検討する。

当時の言説は「神秘」「象徴」「民衆」「人格」「リズム」そして〈遊蕩文学撲滅論争〉、〈白樺〉論争などを通して多様に入り組みつつ、通底するものを持って展開されたことを跡付ける。大正三年から四年にかけて現れた「神秘」の言説は、「内面」から「言語」へという順序を生み、〈深さ〉を問題化する前提として生起した。大正五年から六年にかけての「神秘主義」論争においては、そうした枠組みを再利用しつつ、それを詩人、詩の流派、歴史記述の文脈に接合することで、以後に流通する言説を形成したと考えられる。そしてまたそこでは、文壇における〈遊蕩文学撲滅〉論争や、〈白樺〉論争と、〈深さ〉、「人格」などの点において交錯する言説の生成がみられるのである。そして「民衆」の論理は、「人格」論理に通底する論理を使うことによって、詩の歴史記述の方法それ自体への再編成をはかろうとする一方、実はその根底にある論理は「神秘」「象徴」の論理の再生産であるといった、複雑な概念の絡み合いがそこにはあったことを論証する。

第Ⅲ部「詩の創作に関わる力学の諸相」においては、大正七年から十五年にかけての「詩の作り方」の語られ方を検討することで、そこで前提とされている〈詩〉概念をあぶり出すとともに、山村暮鳥の批評観に焦点を当て、「どのように詩を評価するか」という問題が描き出す〈詩〉概念と、経済活動を含んだ雑誌経営の問題がどのような関係を取り結んでいるかを明らかにする。

詩というジャンルに限らず、文学作品を生産する者が、文学を評価する立場に立たされることは、時代や分野による違いはあれ、頻繁に発生する出来事である。そうしたときに、「書く者でもありつつ、書かれたものの価値を判断する者である」ことが、「書き手としての主体」と「評価者としての主体」の分裂として問題になってくる。特に、密なネットワークでつながれた文学の場において、有効な分析手法であるとして、「詩人」を「評価される」視点ではなく、「評価する存在」としての視点から捉え直す。詩人ネットワークの中にいる詩人であれば、詩をめぐり「評価する／評価される」状況に投げ込まれた存在であることから無縁ではいられないという観点から、「評価されるものとしての詩」だけを検討するのではなく、「評価する者」として詩人を検討し、詩人をめぐる「評価する／評価される」網の目を通し、詩を「書き／読む」コミュニティの様態を明らかにする。

このように、山村暮鳥を基準点とし、「評価する者」の視点から山村暮鳥の「批評観」を、「批評観」そのもののレベルにおいても検討しつつ、暮鳥が取り巻かれた状況とも関わらせ、暮鳥における「批評行為の意味」を、可能な限りその

「状況の中において」分析する。この分析により、「理念の問題」としてだけで片付けることのできない、暮鳥の「批評行為」が引き起こした概念系、実践系の複雑なありようが示される。山村暮鳥の発言を中心化して分析しながら、これらの発言は、周囲を取り巻く様々な発言と密接に絡み合っていることも明らかにする。その絡み合いを絡まった状態のまま記述し、そのことが「詩をめぐる概念系のありよう」を明らかにするためには必要であると主張する。

第Ⅳ部「新体詩以後」はいかにして「日本の詩の系譜」に接合されたか」は、検討の範囲を大正十年から昭和五年まで拡張、大正末期以後に、「新体詩」以降の詩の歴史を、古事記や日本書紀の歌謡に接続し、古代より連綿と続く「日本の詩」の延長線上に現代の詩が位置づけられていく様を検討する。そこでは同時に、アカデミズムにおける歴史記述との相互関係や、「児童自由詩」概念の生成、川路柳虹の「新律格」の試みが、当時の詩の歴史記述の力学との関係において検討される。

このような観点からの分析によって、アカデミズムにおける文学史記述、詩人の書く「詩史」、そして「児童自由詩」の実践は、すべてが共犯関係を結んでいることを実証する。アカデミズムの示す記述の装置は、詩人の書く「詩史」を縛り、詩壇のヘゲモニー争いに利用されると同時に、「新体詩以後」の歴史を「日本の古代からの詩」の正統な系譜の中にあるものとして位置づけるために利用される。同時に、「児童自由詩」といった実践も、これらと同じ図式に依ることで、児童における「自由詩」＝「内在律に発する自然」であることを自明視させる。同じ装置は、川路柳虹の「新律格」といった詩人の発想の方向性自体を縛るものとしても機能していく。そのように、「文学史」の理論装置は、当時の「詩」の位置を画定する力を発揮するのみならず、詩におけるさまざまな実践の機制としても作用している。

そうした、同時代的な文学史記述における理論のありさまと、文学の実践のありよう、それらは決して個別に論じてよいものではなく、相互の絡み合いの中で考察していくことが必要であると結論付ける。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 押 野 武 志
副 査 教 授 中 村 三 春
教 授 権 錫 永

学 位 論 文 題 名

「日本近代詩」をめぐる概念編成の力学

本論文の目的は、日本の明治以降に現れ、現在「詩」あるいは「日本近代詩」という名前によって当たり前にくられる領域が、どのような概念編成過程で出現したのかを、重層的に明らかにすることである。従来の「日本近代詩」という事後的に獲得された視点を前提とする視点から離れ、本論文においては、検討対象となる時期のパースペクティブに寄り添うことが目指される。詩が「文語詩」から「口語詩」へ移り変わったといった歴史記述は現在の視線からは自明視されがちであるが、「口語詩」概念が成立していない地点においては、そもそも「文語詩」を書いているという自覚それ自体が成立し得ないはずであり、その地点における「詩の将来」の見え方は、まったく異なっていたはずである。

しかし、一旦、「文語詩から口語詩へ」というパースペクティブが獲得されてしまえば、当時の固有の文脈は捨象され、事後的な視線によって当時の実践が記述されていくことになる。歴史の記述は、その記述を行う地点の論理に合うよう組み替えられる。さらに、そうして成立した記述は、その後の歴史記述が行われる度に参照され、準拠すべき、あるいは否定されるべき枠組みとして、後の歴史記述を規定する。本論文は、そのように何度も修正される「詩」の領域をめぐる歴史記述の様態を明治三十年代から昭和初期にわたって以下の四つの観点に的を絞り明らかにする。

第一の観点は、現在「口語詩」「口語自由詩」と名指されている領域がいかにして自明なものとして成立したかである。「日本」の「近代」の「詩」が、「新体詩抄」に始まり、「文語詩」「文語定型詩」から、「口語詩」「口語自由詩」へと発展してきたという歴史観が、どのようにして成立したのか、詩論を中心に各時期の歴史記述の編成、概念編成の問題から検討する。

第二の観点は、「大正期」に出現する「詩」における均質空間の検討である。大正期において、「口語」を切断面として「詩」の「現在」と「歴史」を語る語り方がこの時期出現する。「詩話会」に代表されるような、「詩」の「現在」の場に存在する詩人を同一の平面に並べる語り方、および、過去の詩と現在の詩を「口語の使用」の有無によって分けていく歴史記述の手法が、どのように成

立しているかが検討される。それとともに、大正期に流通する「神秘」「象徴」「民衆」「人格」「リズム」といった概念が、どのように流通し、再編成され、それら概念が、詩の「現在」と「歴史」を記述する装置として利用されていくありさまを分析する。

第三の観点は、第二の観点によって明らかにされる「大正期」の言説のあり方が、実際の詩の創作・評価の現場にどのように適用されているのか、その実態の解明である。大正期に成立する理念は、「詩史」といった記述の場にとどまらず、詩の実作への強力な機制として作用していたことを「詩の創作法」や、詩が評価される現場の分析を通して明らかにしていく。

第四の観点は、「新体詩の発生以降の詩」が、領域として「日本」の「詩」の通時的なパースペクティブの中に定位されることの問題性である。過去から現在まで続く「日本」の「詩」という時系列の中に、「新体詩以後」の「詩」はどのようににはめ込まれるのか、そこに至る力学が分析される。

以上のような本論文の観点と方法を検討した上で、当該研究領域における本論文の研究成果を確認し、本審査委員会は、全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認定した。